

Vladimir Nabokov の *Invitation to a Beheading* における インターテクスチュアル 『アリス』

丸山美知代

“I’ll be judge, I’ll be jury,” said cunning old Fury;
“I’ll try the whole cause, and condemn you to
death.”

—Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*

Nabokov (1899-1972) が Sirin というペンネームで執筆したロシア語作品のなかで、もっともアレゴリカルでファンタスティックな *Priglasshenie na kazn’* は、1935-36年に亡命ロシア人雑誌 *Sovremenniya Zapiski* に連載後、38年に出版されたものである。ステージセットに似た牢獄に住む登場人物たちの非日常を描いたファンタジーという指摘は、後期の英語小説との比較でなされることが多く、出版以来、政治的、メタフィクション的、哲学的、宗教的観点で説明が尽くされてきた¹⁾。

例を挙げれば、そのアレゴリー性ゆえに Kafka の *The Trial* と比較され、革命後のソビエト独裁政治のまやかしへの批判として、あるいは作品の執筆場所が第二次世界大戦直前のドイツであることから、ナチス・ドイツ台頭の予兆として、また不条理な理由から死刑囚となった Cincinnatus C.²⁾ を描くディストピア小説と解釈されている³⁾。

そういう反応を牽制してのことか、作家監修のもと、息子 Dmitri の翻訳によって1959年に出版された英語版 *Invitation to a Beheading*⁴⁾ の前書きで、当時 Kafka を読んだことがなかったと、その影響を否定している。また政党には関心がないので、*G. H. Orwell* (George Orwell + H. G. Wells) も *Tolstoevski* (Tolstoy + Dostoevsky) とも無関係で、果ては Baroness Murasaki とも、1941年に出版されることになる *Sebastian Knight* とも比較されるいわれはないとして読者を煙に巻く⁵⁾。Nabokov のような作家の場合、自作の翻訳はいわば新たな創作行為に等しく、作家の翻訳版前書きが、20年前の執筆当時のことを正確に伝えているなどと安易に考えるべきではないだろう。しかし同じ前書きで、作家が本作品を「虚空のなかのバイオリン」“a violin in a void” (*Invitation* 7) と呼んでいることを見逃してはならない。フェアリーランドのような空虚な世界にあって、バイオリンが奏でる真実の音色は確かに聞き分けられるのである。

また Nabokov は、自身が生み出した架空の作家 Pierre Delalande (Pierre A. Farland) にこそ最大の影響を受けたと述べ、エピグラフに “Comme un fou se croit Dieu,/ Nous nous croyons mortels.” という Delalande の *Discours sur les ombres* からの不可思議な文章を引用している。「狂人が自分を神だと考えるように、我々は自分を死すべきものとする」とは、そもそも、我々が死すべき存在と考えることを肯定しているのか？ 仮に否定しているとすれば、「人間が死すべき存在でない」と

はどういうことなのか？このことでも明らかなように、*Invitation* は意味の二重性とナンセンスに満ちた散文詩であり、同時に人間の死と不死にかかわる極めて形而上的なディスクールなのである⁶⁾。しかも虚空に響くバイオリンの音色は、その詩的ファンタジー性ゆえに読者を魅了し続けてもいる。

作家の主張にもかかわらず、モダニズムの影響を思わせるものがあることは否めない。だが直接的には、彼が否定した先行作品リストから（たぶん意図的に）外されている作品こそが、真の先行作品と言えるのではないかと筆者は考える。あまりにも親しすぎて意識さえしなかったのかもしれないが、ある先行作品をテキスト中に忍ばせている事実は否定できないのである。それは少年 Nabokov が愛読し、1923年に前半部分をロシア語に翻訳・出版したことで知られるヴィクトリアン Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass* である⁷⁾。*Invitation* 執筆時、Nabokov の意識の底には少なくとも *Alice* のモチーフや言葉があったように思われる。これまであまり触れられなかったが、*Invitation* には *Alice* のインターテクスチュアル性が顕著なのである⁸⁾。*Alice* との類似点を最初に指摘した Greb Struve は、*Alice* が赤の女王に向かって「あなたたちはただのカードにすぎない」と叫ぶや、カードが空中に舞い上がり、*Alice* のうえに落ちて来る *Alice* のクライマックス・シーンと⁹⁾、*Invitation* でステージセットが崩れ落ちる最終場面との類似性に着目している¹⁰⁾。さらに *Alice* では、書き出しと後書きで、*Alice* が迷い込んだ理不尽でファンタスティックな世界が夢であったことが明かされている。Nabokov 自身が「もっとも愛している」¹¹⁾ という *Invitation* でも、*Alice* ほどあからさまではないものの、*Cincinnatus* の牢獄は夢の世界であることが見え隠れする。様々な解釈を引き出し続ける *Invitation* には、他にも *Alice* の世界に実によく似た点がある。センスを底に潜ませたナンセンスな言葉の二重性に依拠するファンタジーのパターンを使って、Nabokov が奏でようとした形而上的ディスクールを読み解き、*Invitation* における作家の策略について考察するのが本稿の主たる狙いである。

1. 不思議の国の死刑宣告

In accordance with the law the death sentence was announced to Cincinnatus C. in a whisper. All rose, exchanging smiles. The hoary judge put his mouth close to his ear, panted for a moment, made the announcement and slowly moved away, as though ungluing himself. (*Invitation* 11)

物語は判決の言い渡しから始まる。判事は被告の耳元で死刑判決を囁き、皆がまるでその結果を喜んでいるように、微笑みながら立ち上がる。一方で、法律に則ったとは言え、後に二人の法律家の弁論に“opacity” “translucence” という言葉が出てくるだけで、その罪状は伏せられたままである。この状況は *Alice* のハートの女王の言葉 “Sentence first-verdict afterwards” (*Alice* 108) そのもので、*Alice* がそれをナンセンスだと批判すると、女王は怒って「首を刎ねろ」“Off with her head!” と叫ぶのである。肝心の処刑方法については、後に判決の言葉が引用される箇所、斬られた頭を連想させる「赤いトップハットを被る」“... you will be made to don the red top hat.” (*Invitation* 21) という隠語で伝えられるのみである。

裁判での弁護人と検事は Alice の Tweedledum と Tweedledee のように、法制上、本来異母兄弟であるべきなのだが、そうでない場合は、メーカーで外見を似せて、5千語以内で弁論を済ませなければならないという。しかも古典的斬首刑を主張する弁護人が、処刑法に関して新しいアイデアをもつ検事を言い負かしたのだ。どちらにしても Cincinnatus が有罪であることを疑わず、処刑の方法だけで争っており、まるで Alice のネズミの悲しい長話 “long tail[tale]” 中の犬の Fury の言い草に似て、何とも理不尽な裁判なのである¹²⁾。6章にいたって、Cincinnatus の正式な罪名が “the most terrible of crimes, gnostical turpitude” (*Invitation* 72) であると明かされる¹³⁾。語り手は「稀で、発音しにくい」罪名なので “impenetrability” “opacity” “occlusion” と言い換えられるが、重罪ゆえに、罪人はあえて知らされることのない斬首刑の日を砦の監獄で待つのだと説明する。さらなる罪の実体は語り手と Cincinnatus 自身の発言や手記において明かされることになる。

ここで Cincinnatus が置かれた状況を詳細に検討してみよう。彼を疎外し、同時に閉じ込めているこの窮屈な世界の特徴は、Matter of Fact Street が示すとおり、名前が実体であり、実体が名前だということだ。Alice が森で出会った名前を忘れた子鹿は、Fawn という名であることを思い出した瞬間に、人間 Alice への警戒心を露にする。名前がないことで Fawn は無条件に Alice を受け入れるが、名付けようのないものも名前を得ると、それに相応しいものに変化してしまうのだ¹⁴⁾。*Invitation* の語り手は “That which does not have a name does not exist. Unfortunately everything had a name.” (*Invitation* 26; emphasis added) と皮肉っているが、この世界には「不幸にして」Cincinnatus の本質を表す名前は存在しないのである。独房の壁にたぶん同罪の先住者が書き残した “Nameless existence, intangible substance” (*Invitation* 26) が Cincinnatus なのである。つまり彼の実体は名付けようがなく、「幸運にも」名前を与えられたならば、彼は危険でも恐怖心を呼びさます存在でもなくなってしまい、同時に彼自身の本質は失われてしまうのである。

死刑判決を言い渡された Cincinnatus は、即座に Alice が迷い込む不思議の国のような独房に監禁されることになるが、そこは言葉がつねに二重の意味を帯びる悪夢の世界である。独房の罪人は、覗き穴から Rodion たちにつねに監視される。そして役者を注視する観客のように、語り手の言葉を通じて読者も監視役になる¹⁵⁾。背中や脇の綻びから詰め物を覗かせる人形のような三人の R、看守 Rodion、監獄長 Rodrig Ivanovich、弁護士 Roman Vissarionovich が入れ替わり立ち替わり独房を訪れるが、その様子は一人の俳優が早変わりして何役も演じている安っぽい芝居を思わせる。実際に、Cincinnatus が Rodion に誘われてワルツを踊りながら独房からいとも簡単に滑り出して行った時、ボルゾイ犬のようなマウスピースを着けてライフル銃を持った監視に出くわすが、戻って来てみると、出演を終えた舞台裏の役者のように監視役たちは衣装を脱いで寛いでいるのである。

また不自然な月の光はまるでステージ照明のようで、独房には囚人のペットとして人工の蜘蛛が飼われていて、一度目前に現れた Rodrig が一瞬のうちに消え去ったかと思うと、一分後にはドアから入ってきて、かけていなかったはずの眼鏡を外して折り畳んでいる。ありえないことが次々に生起するのだ。しかしここで注目すべき点は、Alice が理不尽な出来事に戸惑いつつも、夢の世界に順応しながら冒険したのに比して、あからさまな見せかけの世界の囚人である Cincinnatus には一時の空想という気晴らし以上の冒険など望むべくもないのである。

ところで *Invitation* はファンタジーらしく三人称で語られており、特に前半部分では語り方に工夫が凝らされている。たとえば語順を換えただけのリフレインである。これは書くことを憶えた人が文章を幾度も書き換えて完成させようとする様に似ている。“It was plain that he was upset by

the loss of that precious object. It was plain. The loss of the object upset him. The object was precious. He was upset by the loss of the object” (*Invitation* 36) Alice でも、蛙の召使いが魚の召使いの“*For the Duchess. An invitation from the Queen to play croquet.*”という言葉に厳かに復唱して“*From the Queen. An invitation for the Duchess to play croquet.*” (*Alice* 51) とわずかに語順を入れ換えて繰り返している。さらに語り手は監獄の時計の音が時間の経過を住人たちだけでなく読者にも意識させるように描写しているが、一日目が終わって罪人が闇の中で横になったとき、眠らせてなるものかともいうように、時計が、あるいは小道具係が11時を打った後、しばらく考え込んで、もう一つ打つ。さらに「暗闇と静寂が混じり合い始める」眠りの時刻が、先の間の抜けた時計の音に破られ、そのあと「完全に暗闇と静寂が混じり合う」と描写される。

Darkness and silence began to merge but the clock interfered; it struck eleven times, thought for a moment, and struck once more, and Cincinnatus lay supine gazing into the darkness, where bright dots were scattering and gradually disappearing. Darkness and silence merged completely. (Invitation 20 ; emphasis added)

2章で Cincinnatus の生い立ちを語る際にも、“*Twelve, thirteen, fourteen. At fifteen Cincinnatus went to work in the toy workshop,*” (*Invitation* 27) や “*Nineteen, twenty, twenty-one. At twenty-two he was transferred to a kindergarten....*” (*Invitation* 30) という歌の繰り返しのよう語り方を採用している。

ところで10章で Rodrig たちが Cincinnatus の fellow prisoner として心待ちにしているもう一人の囚人が到着し、特別室に収監される。彼の本名は Pyotr Petrovich だが、フランス人風に気取って M'sieur Pierre と名乗っている。Pierre と Cincinnatus は背の低さと言ひ、年齢と言ひ双子のように似ている。だが結局は同じ理屈をこねるのに、Tweedledum に Tweedledee がまずは “contrariwise” と反論するふりをしたように、完全に同じという訳ではない。勿ねられる運命の細いうなじには “tuft of wet hair” が垂れているが、Cincinnatus のロシア語版 Tsintsinnat の “ts” を表すキリル文字 Ц は、一房の髪が刈り取られた Ц を鏡に映した形をしている。しかもキリル文字の Ц はアルファベットの P (ierre) なのである¹⁶⁾。P. の関心は、赤字の処刑日に C. の首を見事に勿ねることと赤魔術にしかない。彼は薄っぺらな首切り役人そのもので、Cincinnatus とは似て非なる存在なのである。Pierre は Nabokov がロシア語で *poshlost*¹⁷⁾ と軽蔑するセンチメンタルな軽薄さと酷薄さ、まやかしの高貴さや寛大さを体現しており、Cincinnatus の関心を惹くために上手くもない手品やゲームを披露し、アクロバットまでやってのける。効果がないと分かったら、C. の部屋までトンネルを掘って救助者のふりさえする。夜毎、近づいてくる掘削の音に、微かな脱出の希望さえ抱いていた Cincinnatus は、結局、壁に穿たれた穴が「赤っぽい」偽の脱出口だと知ることになる。 (*Invitation* 164) Pierre は、罪が何であれ、悔い改めてありがたく処刑される理想の囚人に Cincinnatus を仕立て上げ、自分は尊敬される首切り名人の役を演じようとしている。死刑執行人の成功は死刑囚の協力なしにはありえないのである。また Cincinnatus の不貞の妻 Marthe も、夫を気遣い悲しみにくれる妻の役を演じているにすぎない¹⁸⁾。彼らは、そのような意味において「透明」であると言えるのだ。

処刑日が明後日と告げられた後、Cincinnatus は看守長の12歳の娘 Emmie に誘われて、March

Hare のティー・パーティーのような、看守長夫人主催のお茶の席に加わらされる¹⁹⁾。そこには Alice が座ったような大きな肘掛け椅子があり、Cincinnatus は Alice とは違い、話の輪に入ることもなく、不本意に意味の分からない儀式に加わっている人のようにぼつんと座っているだけである。次にハートの女王のクロケット・マッチに似た町を挙げての盛大な処刑前夜パーティが Pierre と Cincinnatus のために催される。二人はしきたりに則って、同じ Elsinore ジャケットを着て、Alice の双子のように肩を組んで登場する。残酷な企てを秘めた P は C の夫か恋人のように振る舞うが、ページェントの目玉となる P と C をかたどったライトの点灯は失敗に終わる。これはすべてが不発に終わることを予告している。なぜなら C がこの紛い物の世界に同化するのを、肉体だけの人形たちに屈服するのを拒んだからである。

2. 不透明な Cincinnatus と gnostical turpitude

Cincinnatus の罪名 “gnostical turpitude”、つまり「グノスティカルな卑劣行為」罪とは何だろう？彼は 30 歳代の既婚者だが、体つきは木の葉のように軽くて弱々しく、子供のように小さく無力である。時折、動揺のために感情を露にする C と、additional C. (*Invitation* 15) と呼ばれる落ち着き払った C が常に表裏をなして存在していて、苛立ちや悲哀を態度に表す C とじっと物思いにふけるもう一人の C がいるのである。透明でカードのように平板な他の登場人物に決定的に欠如していて Cincinnatus だけがもっているもの、それは真の自己 “self” (*Invitation* 24) への希求であり、魂の世界への洞察力で、それが身元不明の父から受け継いだ罪の源 (opacity) でもあり、彼を他から際立たせ、理解不能ゆえに恐れられ憎まれる原因となっているのだ。

奇妙なことに、彼は死刑自体よりも処刑までどれだけの時間が残っているかをしきりに気にしている。終わりの時が予測できなければ、もっとも罪深いとされる言葉で真実の思いを吐露できない。時間切れになって、それまでに書いたものが無に帰すことを恐れているのだ。

ところで誰の手によるのか、独房の机の上に置かれていた真新しい紙に、削りたての「Cincinnati 以外の人の命と同じくらい」(*Invitation* 12) 長い鉛筆で、彼はまずこう書き付ける。“In spite of everything I am comparatively. After all I had premonitions, had premonitions of this finale.” (*Invitation* 12-3) 彼は躊躇しながらも慎重に “premonitions” について綴り始める。Cincinnatus の分裂は物語が進むにつれて影を潜めるようになるが、それは彼の未熟な思想と未完成な話し言葉 “kind you very” や空白だらけの書き言葉 “In spite of everything I am comparatively...” が徐々に成熟することと連動している。確実にもたらされる「ここ」“tum” での死を恐れつつ、ここでない「そこ」“là-bas” の予兆を書き留めようとしているのだ。幼い頃から「透明」を装い、人目を欺いて生きているが、実は不透明で「真っ黒な」者も自由でいられる「そこ」へ、脱獄などしなくても、コピーではなくプラトンの真理と善の原型が存在する「そこ」へ脱出できるかもしれないと直感しているのだ。その予感、詩人 Cincinnatus の言葉が完成することで成就するのである。

もちろん「そこ」への直感がなかなか確信に繋がらないが、回想と黙考を続けるなかで、予兆はさまざまな形で現れ始める。たとえば 4 章で、彼は写真集を眺めている。飛び込み選手が落下する途上、空中に浮かんで休憩しているような一瞬が捉えられた写真である。Cincinnatus はそれが写真技術のトリックであると結論づけているが、8 章ではピンクのスモックを着た子供の Cincinnatus

が、プールへ飛び込もうとする人のように教室の窓から無意識のうちにゆっくりと空中へ歩みだす場面が回想として描かれている。“I saw myself, a pink-smocked boy, standing transfixed in mid-air...” (*Invitation* 97) 彼は落下することもなく空中に停止していたことを覚えていたのである。死が永遠に繋がる瞬間とは、このような状態を指すのかもしれない²⁰⁾。さらに書き続ける Cincinnatus は死と夢と永遠を繋ぐものを “something”, “fantasy”, “dreams”, “semi-reality, the promise of reality, a foreglimpse and a whiff of it” (*Invitation* 92) と様々に言い換えているが、そうする理由は、決定的な表現がみつからないからだ。彼は伝えたいことを直接的な言葉で書き表すことはできないが、詩人のように思考し、予兆の²¹⁾ 比喩としてなら可能なのではないかと感じる。語り手も、微かな空の裂け目や鏡のきらめきや一陣のすきま風から、「そこ」の存在を彼に感じ取らせようとする。母親だという Cecilia C. が突然訪問した時、Cincinnatus に偽物と疑われながらも、彼女は “nonnons” という玩具の話をする。一見形のないもの、無意味な “nonnons” を特別な鏡に映してみると、そこには端正な真の姿が見えるのだという。この時、二人の間の暗号でもあるかのように、彼は目に見えるものの欺瞞と見かけが醜いものに内在する美についての直感が正しかったと理解する。「恐ろしい人生という衣服の裾がめくれ上がった瞬間に真実の裏地がチラリと見えたようだった」 “... as if a corner of this horrible life had curled up, and there was a glimpse of the lining” (*Invitation* 136) は Nabokov お馴染みの比喩であるが、Cincinnatus はものを刺し貫くように真に生きたものと命のない紛い物を見分けられるようになっていく。まだ正確な言葉で表現はできないが、文学作品の登場人物や読者がそうであるように、さまざまな比喩の意味を理解することで、向こう側への確信を獲得していくのである²¹⁾。

さてファンタジーらしく、長期にわたって延期されたはずが、急に死刑執行の 때가 告げられる 19 章において、看守が囚人用ペットのゴム製蜘蛛の餌として持ち込みながらも逃がしてしまった大きな蛾を語り手は次のように描写している。威厳にみちた実在の蛾ゆえの重み、色、手触りを描写する言葉には衒いも飾りもない。

It was only a moth, but what a moth! It was as large as a man's hand; it had thick, dark-brown wings with a hoary lining and gray-dusted margins; each wing was adorned in the center with an eye-spot, shining like steel.

Its segmented limbs, in fluffy muffs, now clung, now unstuck themselves, and the upraised vanes of its wings, through whose underside the same staring spots and wavy gray pattern showed, oscillated slowly, (*Invitation* 203)

作品中で唯一、精気に溢れた蛾は、まるで大気中に呑み込まれたように突然、姿を消すが、処刑に連れ出される Cincinnatus は、ベッドの脚に止まって就寝中の蛾の充実した体にそっと触れ、“What unyielding gentleness!” (*Invitation* 206) と感嘆する。Cincinnatus のように穏やかで不屈の蛾は、夜の訪れとともに開け放たれたドアから脱出するだろうと予感するのである。この後、書きつけた最後の言葉 “death” をあえて消去し、手を貸そうとするおせっかい焼きたちに “By myself” と繰り返しながら断頭台に向かう。なぜなら処刑者たちの手を軽々とすり抜けて空中に姿を消す蛾は、自らの「ここ」での死と、それによる終わりを拒否する Cincinnatus 自身のメタファーでもあるからだ。

3. Cincinnatus の覚醒とその後

Cincinnatus は頭を処刑台に乗せ、Pierre の命じるままに 10 まで数え始める。一方で、もう一人の Cincinnatus は一瞬の苦痛のあと、“Why am I here? Why am I here? Why am I lying like this ?” (*Invitation* 222) と自問しながら立ち上がる。彼は死んだのか？ 答えのヒントは次の Cincinnatus の奇妙な自己解体と消失現象に見てとれる。

He took off his head like a toupee, took off his collarbones like shoulder straps, took off his rib cage like a hauberk. He took off his hips and his legs, he took off his arms like gauntlets and threw them in a corner. What was left of him gradually dissolved, hardly coloring the air. At first Cincinnatus simply reveled in the coolness; then fully immersed in his secret medium, he began freely and happily.... (*Invitation* 32)

Alice の死刑執行人が Cheshire-cat の首を刎ねることはできないとして、“...you couldn't cut off a head unless there was a body to cut it off from...” (*Alice* 77) と主張する通り、人形のように体の各部位が分解できる Cincinnatus は、わざわざ斧で首を切られなくても自分で頭を取り外すことができる。また残った部分（おそらく胴体の肋骨を除いた部分）が Cheshire-cat のように次第に消えて、この世界の空気中ではなく、「秘密の溶媒の中」で「自由に嬉しげに何かを始めた」とある。その様は生まれる前の母の胎内に回帰した胎児のようである。彼は泳いだのだろうか、跳ね回ったのだろうか、語り手はあえて語らないが、暴力的な処刑死によらなくても、魂が「ここ」から徐々に消滅し、異次元へと移行する可能性を示唆しているのは間違いないだろう²²⁾。

Alice が夢から目覚める時の描写に似て、*Invitation* の処刑場では、舞台装置が崩れ落ちる。Nabokov にとっては異例の早さで「夢中になって一気に 2 週間で書き上げた」²³⁾ という作品では、語り手が積み上げてきた Alice 的ファンタジーに似た *Invitation* の世界を、遊びに熱中する子供のように一気に叩き壊してしまうのだ。背後から見れば区別がつかない Alice 中のカードの召使いたちのように、見極めがつかなくなった Roman、Rodrig、Pierre は平たく、蛹のように小さくなる。“Cincinnatus made his way in that direction where, to judge by the voices, stood beings akin to him.” (*Invitation* 223) とあるように、声から判断すると、たぶん人間的であるがゆえに不透明で、「ここ」では疎外されたであろう「同類」の声がするほうに Cincinnatus は歩いて行く。換言すれば、「ここ」の悪夢から醒めることで、Cincinnatus は解放されたのである。登場人物を冷酷無比に操ると批判される Nabokov ではあるが、Cincinnatus のような穏やかで無力な憐れむべき存在を、死なせることで救い上げようとする。しかも死は終わりではなく、*Bend Sinister* のコーダに似て、魂の異次元への軽やかな飛翔とでも言おうか、フィクションでのみ可能なメタフォリカルなものである²⁴⁾。それは一般にリアリティーと呼ばれるものこそが実は幻影であり、幻の夢から醒めたところにこそ真実があり、夢を見ること、幻想に囚われることと、獄中の Cincinnatus が密かに行ったように、イメージーションを働かせて言葉を生み出す行為とは厳密に区別されなければならないことを示唆している。*Looking-Glass* には、Alice と Tweedle-dum と Tweedle-dee が、木に凭れて高いびきで眠りこける Red King の前に立ち、王の夢の中の Alice は、王が醒めれば消滅するかどうか

か議論する場面がある。Cincinnatus も Red King のように自分の夢を見ていたのだろうか。だが真実をメタファーとして暗示するもの、理想の世界を予感させる手がかりが、いわゆる「リアリティー」と呼ばれるものの中に潜んでいるために、夢と覚醒の、紛い物と真実の厳密な区別がつきにくいのだ。目覚めることの難しさを語り手は以下のように表現している。

... even though he knows perfectly well that the entire masquerade is staged in his own brain, Cincinnatus tried in vain to out-wrangle his fear, despite his understanding that he ought actually to rejoice at the awakening whose proximity was presaged by barely noticeable phenomena, by the peculiar effects on everyday implements, by a certain general instability, by a certain flaw in all visible matter—but the sun was still realistic, the world still held together, objects still observed an outward propriety. (*Invitation* 213)

Nabokov が “I know more than I can express in words, and the little I can express would not have been expressed, had I known more” と述べているとおり²⁵⁾、グノスティシズムで言うところの魂の不滅という、ある意味で耳慣れた、しかしフィクション化するととなると困難な業に挑戦するために、あえて Alice の構図をなぞってフェアリーテールらしい作品に仕上げたのである²⁶⁾。

Alice's Adventures のあとがきで、夢から覚めた Alice は、奇妙だが素晴らしい冒険の内容を姉に語って聞かせる。そしてその場に残った姉は、先ほど Alice が語った夢の物語を夢に見る。間もなく夢は醒め、ティーカップが立てる音は羊の鈴でクイーンの叫び声は近くの牧童の声であることが分かれば、不思議の国が消え、退屈なリアリティーが取って代わることを知っていても、“She sat on, with closed eyes, and half believed herself in Wonderland,....” (*Alice* 111) とある。Alice の話を姉が夢で反芻する行為、これは書かれた物語を読者が読み、想像力によって反芻することと同じである。そしてファンタジーはそれにもっとも適した形式なのだろう。

Invitation で想像力こそが、自分の救世主であるという Cincinnatus に Pierre はこう反論する。“Only in fairy tales do people escape from prison....” (*Invitation* 114) Pierre の発言は皮肉にも、意図せぬ真実を語っていたのである。自分の住む世界がフェアリーテールであることを知らない処刑人は、奇しくも Cincinnatus が牢獄から逃れ出ることを予言しているのである。

最後に、これまでの議論を踏まえて、エピローグの意味するところを考察してみよう。「狂人が自分を神と考えるように、我々は死すべきものと考えろ」とは、Barabtarlo が示唆するとおり、魂が肉体を離れるその瞬間まで、人間はそれが死なないと確信できずに、自分が“mortal”だと考えるのだ²⁷⁾。その誤った考えから解放されうること示すために、Nabokov はファンタジーを利用したのである。

注

- 1) Ellen Pifer, *Nabokov and the Novel* (Cambridge: Harvard University Press, 1980).
Julian W. Connolly, *Nabokov's Early Fiction* (Cambridge: Cambridge U. P., 1992)
Leona Toker, *Nabokov: The Mystery of Literary Structures* (Ithaca: Cornell U. P., 1898) 等を参照。
- 2) 以後 Cincinnatus と表記する。
- 3) “Welcome to the Block: A Documentary Record in Nabokov's *Invitation to a Beheading*” において

- Brian Boyd は *Conclusive Evidence*, 216-17 から “*Invitation to a Beheading*, which deals with the incarceration of a rebel in a picture-postcard fortress by the buffoons and bullies of a *Communazist* state...” (emphasis added) という作家の発言を引用している。
- 4) 以後 *Invitation* と表記する。
 - 5) Foreword to *Invitation* (N. Y.: Vintage International, 1989), 6.
 - 6) *Invitation*, 9.
 - 7) Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland* (1865) および *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* (1872).
本稿では *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*, Oxford World Classics, 2009 を使用する。
 - 8) Gavriel Shapiro は *Delicate Markers: Subtexts in Vladimir Nabokov’s Invitation to a Beheading* (N.Y.: Peter Lang, 1998) で、キリスト教、ロシア文学、フランス文学などの多様な subtext の存在を指摘しているが、*Alice* への言及はない。
 - 9) *Alice* 109.
Greb Struve, “Nabokov as a Russian Writer,” *Nabokov: The Man and His Work*, L. S. Dembo ed. (Madison: The University of Wisconsin Press, 1997), 48.
 - 10) “Everything was falling. A spinning wind was picking up and whirling: dust, rags, chips of painted wood, bits of gilded plaster, amidst the dust, and the falling things, and the flapping scenery,....” (*Invitation* 223)
 - 11) Vladimir Nabokov, *Strong Opinions*, (Vintage International, 1990), 92.
 - 12) 本稿 epigraph 参照。またこのような裁判がロシアでは 1930 年代に行われていた。
Zhukovsky, Gogol, Zamyatin の作品でも儀式化された処刑ファンタジーが描かれている。また作家は、半ば隔絶された *Alice* の夢の背後には、“the presence of a quite solid, and rather sentimental world” (*Strong Opinions*, 183) があると述べている。
 - 13) この名称は明らかに Gnosticism と関わりがあり、Sergej Davydov によれば、「この世が理想的な形而上的リアリティーの不完全なコピーであり、理想に到達するためには肉体的要素を脱ぎ去り、肉体が神的なものと一体化する必要がある」とする考え方。
Sergej Davydov, “*Invitation to a Beheading*,” *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*, Vladimir E. Alexandrov ed. (N. Y.: Garland Pub. Inc., 1995) に詳しい。
 - 14) *Alice* 156-57.
 - 15) Dale Peterson, “Nabokov’s *Invitation*: Literature as Execution,” *PMLA* 96 (1981), 824-36. Reader response 的解釈を試みる Peterson は、読むことで、Cincinnatus を透明にしてしまう読者のジレンマを論じている。
 - 16) Andrew Field, *Nabokov: Life in Art* (Boston: Little Brown & Co., 1967) 参照。
 - 17) 風景で言えば、白鳥が浮かぶ青い湖のポストカードにあるような紋切り型美のセンチメンタリティーを意味する。(*Strong Opinions* 100)
 - 18) Marthe は Cincinnatus を裏切るだけではない。たとえば役人に媚を売って命乞いをしてきたらしく、罪を認めれば処刑日がずっと先に延びると夫を説得にかかるのだが、彼が拒否した直後、翌日の死刑執行が正式に告げられる。彼女は夫を最後まで弄ぶのである。
 - 19) Emmie はたびたび顔にかかる髪をかきあげる印象的な仕草をするが、*Alice* も “that queer little toss of her head to keep back the wondering hair that *would* always get into her eyes” (*Alice* 110) と書かれている。“A Mad Tea-Party,” *Alice*, 60-68.
 - 20) *Speak, Memory* で、作家は農夫たちに歓迎の胴上げをされる父親が一瞬、空中に漂っているように見えたと述べているが、これは Nabokov の父親の死を予感させる。また暗殺された父の遺骸が棺に横たわる様は、前のシーンの空中浮揚を続けているように見える。
 - 21) Cincinnatus は相手の “pity” という言葉に反応して、自分と同様に人間性を隠して生きているライブラリアンの悲しみに共感する。

- 22) 死後出版された *The Original of Laura* (2008) にも死を前にした Philip Wild の “the act of deletion” が描かれている。
- 23) “...the first draft of which I wrote in one fortnight of wonderful excitement and sustained inspiration.”
- 24) ... it had been proven to him (Adam Krug) that death was but a question of style. (*Bend Sinister* 241)
- 25) *Strong Opinions* 45.
- 26) 注 12 参照。
- 27) Gennady Barablarlo, *Aerial View: Essays on Nabokov's Art and Metaphysics*. New York: Peter Lang, 1993, 31.

引用文献

- Barabtarlo, Gennady. *Aerial View: Essays on Nabokov's Art and Metaphysics*. New York: Peter Lang, 1993.
- Boyd, Brian. “Welcome to the Block: *Priglasenie na kazn' / Invitation to a Beheading*, a Documentary Record,” In Julian W. Connolly ed. *Nabokov's Invitation to a Beheading: A Critical Companion*. Evanston: Northwestern U. P., 1997.
- Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Oxford: Oxford U. P., 2009.
- Connolly, Julian W. *Nabokov's Early Fiction*. Cambridge: Cambridge U. P., 1992.
- Davydov, Sergej. “*Invitation to a Beheading*,” Vladimir E. Alexandrov ed. *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. New York: Garland Pub., Inc., 1995.
- Field, Andrew. *Nabokov: His Life in Art*. Boston: Little Brown & Co., 1967.
- Nabokov, Vladimir. *Bend Sinister*. Vintage International, 1990.
- . *Invitation to a Beheading*. Vintage International, 1989.
- . *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*. Vintage International, 1989.
- . *Strong Opinions*. Vintage International, 1990.
- . *The Original of Laura*. ed. Dmitri Nabokov. New York: Alfred A. Knopf, 2008.
- Peterson, Dale . “Nabokov's *Invitation*: Literature as Execution, *Nabokov's Invitation to a Beheading*,” Julian W Connolly ed. “*Nabokov's Invitation to a Beheading*”: *A Critical Companion*. Evanston: Northwestern U. P., 1997.
- Pifer, Ellen. *Nabokov and the Novel*. Cambridge, Mass: Harvard U. P., 1980.
- Shapiro, Gavriel. *Delicate Markers: Subtext in Vladimir Nabokov's Invitation to a Beheading*. New York: Peter Lang, 1998.
- Sharpe, Tony. *Vladimir Nabokov*. London: Edward Arnold, 1991.
- Struve, Greb. “Nabokov as a Russian Writer,” L. S. Dembo ed. *Nabokov: The Man and His Work*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1967.
- Toker, Leona. *Nabokov: The Mystery of Literary Structures*. Ithaca: Cornell U. P., 1989.

(本学文学部教授)